



Title	<紹介>清原和義著 『萬葉集の風土的研究』
Author(s)	滝川, 幸司
Citation	語文. 1997, 69, p. 42-43
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68920">https://hdl.handle.net/11094/68920</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 清原和義著『萬葉集の風土的研究』

滝川 幸司

「風土」という視点で萬葉集に登場するいくつもの土地とそこに集う人々あるいはそこで詠まれた歌との関わりを明らかにしようとした研究は、久松潜一氏に始まり、犬養孝氏に受け継がれる。犬養氏の業績についてここで述べる必要はないであろうが、本書の著者・清原和義氏は、犬養氏の講筵に連なりその愛弟子として犬養氏の万葉旅行に同伴しつつ自らも全国の故地を巡る、現時点での万葉風土研究の第一人者である。その氏の四十年にわたる故地の踏破に基づく万葉研究の集大成がここに紹介する『萬葉集の風土的研究』である。

本書は、「大伴家持の風土」（水辺の歌人―風土考序説／左保・高円―風土表現の諸相／奈護の海―越中生活の一齣／布勢水海―あじ鴨の群れと藤波の花／難波―堀江の独泳歌／住吉―浜松が根／吉野―遙か越中より／遊び―大宰府の回想／家持と虫麻呂―越中と龍田）、「奈良朝歌人の風土」（山部赤人―明石潟・潮干の道／大伴旅人―鞆の浦・敏馬の崎／笠金村―吉野の瀧と摂播の海／山上憶良―大伴の三津／田辺福麻呂―難波宮の鶴群）、「集団歌人の風土」（防人歌―常陸国久滋川／遣新羅使人 一―内海・筑紫／遣新羅使人 二―筑紫の山々／海浜挽歌―狭岑島・神島／風土の原点―故郷の飛鳥）、「高橋虫麻呂の風土」（風雨の歌人―風土考序説／手綱の浜―常陸風土への挨拶／筑波山―かがひに遊ぶ／苅野橋―東国七夕の別れ／墨吉―摂津住吉の岸／龍田―岡辺の道／虫麻呂風土―連作的手法

について）の四章で構成される。著者が特に力を注がれたのは家持と虫麻呂を論じた二章であろうが、「大伴家持の風土」では、主として越中時代が論じられる（「水辺の歌人」から「布勢水海」）。「水辺の歌人」では、家持の風土、殊に水辺の風土への開眼が越中時代の天平二十年の諸郡巡行にあることを指摘する。例えば、家持は「川」に対して越中赴任直後までは「清き瀬」という観念で詠んでいたのが、この巡行では「立つ瀬」「渡り瀬」「速き瀬」等が詠まれ「清き瀬」がほとんど見られないことを指摘し、巡行における風目によって「清し」という観念から解き放たれたという。またこの巡行では短歌に二地名を詠うことにより空間的な広がりをもち持たせているとも指摘する。著者は、巡行時の作品を所謂「越中秀吟」に匹敵するものと称揚する。越中時代の襲と晴を論じた「奈護の海」「布勢水海」では、家持がいずれも都への回帰を心に描いていたことを指摘し貴重である。また著者は越中時代の家持の風土表現を追究しながら、概してあまり顧みられない越中赴任以後の難波での作品を採り上げることが怠らない（「難波」）。風土表現を通じて家持の歌業の多くを覆い総体的に検討したものと見える。

「高橋虫麻呂の風土」でも家持の場合と同じく風土表現の検討が重ねられるが、「墨吉」では、虫麻呂の詠水江浦島歌の「墨吉の岸」の表現を採り上げ、万葉集中「岸」が一例を除きすべて摂津住吉の「岸」であることを確認し、虫麻呂が浦島子ゆかりの「浦」や「島」ではなく「岸」と詠んだ風土意識を丹念に追うことにより、通常丹後半島とされる「墨吉」を摂津住吉であると主張する。同様に風土表現から歌人の表現の特色を探り、それによって新たな見解を展開することは他にも見られ、「田辺福麻呂」で、福麻呂の難波宮歌第

二反歌の「白鶴乃」を「モモタツノ」と訓むと論じることその一例である。

本書は、著者の恩師・犬養氏の研究を更に進展させたものといえる。本書の序文には犬養氏の温かい激励が記されているが、それに応えるかのように、著者は本書に続いて『万葉空間』（世界思想社）を出版された。ここでは「空間」という観点も導入され、今後の更なる展開が望まれたが、本年（一九九七）六月九日、著者は急逝された。五十八歳。ご冥福をお祈りする。（一九九六年五月、塙書房、五〇六頁、九、五〇〇円）

——本学大学院博士後期課程——